

知性層構造モデルの再構築と階層的思考の実践的応用 ～多層的知性理解による思考深化の枠組み～

成田 こうじ†

2025年3月24日

Security Innovation Project
行政書士事務所みまもり

本論文では、現代社会における“知性”という概念の多義性と、その階層的構造が正確に理解されていないという問題を出発点とし、思考の深化と実践的応用の可能性を視野に入れた「知性層構造モデル」を再構築する。提案するモデルは、知性を以下の5層（表層知性・構造知性・意味知性・響き知性・存在知性）に分類し、それぞれの思考構造・知覚世界・表現形式の違いを明らかにするものである。

また、本論文では各層間の遷移構造、下層の包含が上層知性に与える影響、異才型知性の構造的特徴についても検討を加える。さらに、このモデルを通じて、組織運営・教育設計・対人支援などへの実践的応用の枠組みを提示する。最終的に、知性を単なるスキルや能力ではなく、「思考の空間構造」として再定義し、社会の知的基盤に新たな視座を与えることを目的とする。

1. 序論

現代社会において「知性」という言葉は広く使われているものの、その内実は極めて曖昧である。知性はしばしば、論理的思考力や言語運用能力の高さと同一視される一方で、芸術的感性や他者理解、あるいは深い精神性までも含めて語られることがある。このように、知性という概念は多義的であり、実際には複数の次元を持っているにもかかわらず、社会的には一面的に評価されやすい傾向がある。

加えて、教育・組織運営・社会評価の文脈においても、知性が「情報処理能力」や「論理的整合性」といった表層的機能に矮小化されて扱われる場面が多い。結果として、より深層に存在する知性の多様性や階層性が見落とされ、本質的な思考の深化や人間理解が妨げられている。

本論文では、こうした状況に対するひとつの理論的アプローチとして、「知性層構造モデル」を提案し、それぞれの知性の階層が持つ構造的特徴と相互関係を再定義する。本モデルは、知性を五つの階層—表層知性・構造知性・意味知性・響き知性・存在知性—として捉えるものである。各

層は、それぞれ異なる思考構造、認識方法、世界との関わり方を持っており、知性の発達や遷移は単なる知識の増加ではなく、認識そのものの質的変容を伴うことを前提とする。

本稿の目的は、この知性層構造モデルを理論的に整理しつつ、各層の特徴と関係性、そして上層への遷移構造の分析を通じて、知性理解の新たな地平を提示することにある。また、階層的知性理解は単なる抽象理論に留まらず、思考支援、教育デザイン、組織構築、社会設計といった多様な実践領域への応用可能性を持っている。

本稿では、まず知性層構造モデルの全体像と各層の定義を示し、その後、各層の認識特性や世界知覚の違いについて考察する。さらに、下層を経ずに上層に至る知性の在り方や、階層的知性の偏在が社会に及ぼす影響についても検討する。最終的には、知性を「階層的空間構造」として再定義することによって、現代における思考の深化と実践的知の再構築を目指す。

なお、本モデルにおいて、特に第3層（意味知性）と第